

—ただキリストと共に歩む—

水戸無教會

第7号

編集 半田梅雄

晴無讃歌

半田梅雄

つゝましく、謙遜に
召されしものゝ深き自覚と
永遠に生きる生命の希望と
あふれくる喜悦
罪赦されし嗚咽
かくて重ねたる六一号
満五才の
「晴無」よ！
神の尊き僕「晴無」よ！
あなたが歩んで来た足跡に
見よ！
芽ぐみ、育ちつゝある
数々の新しき生命を、
武蔵野の原、
轟々と上り下りする爆音の
傍に、
一人は諄々と信仰の勝利を
語り、
靈峯不二の裾野に
朽ちざる若木は
陣地より強き根を張る。

磬梯の懐深く
阿寒の湖のほとり
かつて夷を攘ちし鹿島洋
人は食を求めて絶叫する時
彼は貧しき炉辺に
福音を語る。
或者は木椅子により
或者はベッドに
或者は子を寝かしつゝ
或者は眠る前の五分を
唯聖書に
唯キリストに
唯神のみ前に
み国の栄を祈り続ける。
間違つてもいゝ
うろたえてもいゝ
恥はすべて主が負い給う
たゞ信じ
たゞより頼め
幼きは幼きまゝに
代え難い使命を持つ

「晴無」
満五才
病者読み
病者語り
病者書き
病者刷る
あゝ
健康と富と権力におごれる
者よ
君は聞いたか
君は見たか
幸福こゝにあり
平和こゝにあり
死も威張るな
限りなき生命の進軍を
何者も阻むことは出来ぬ
栄光
永久に神にあれ
アーメン
「註」「晴無」晴風無教會誌、病床を唯キリストのみに生きる療養所の兄弟姉妹たちによる原稿・編集・印刷・発行の月刊二六頁の雑誌

神の愛とキリストの愛と

石原 秀 志

「主は、わたし達の為にのちを棄て、下さった。

それによつて、わたし達は愛と知つた。それゆえに、わたし達もまた、兄弟の為にのちを捨てるべきである。」(ヨハネ一書三・一六)

「神はそのひとり子を賜つたほどに、この世を愛して下さつた。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ伝三・一六)

或人は此の後者をば「新約の最高峰」と呼んでいますが、前者も亦ヨハネ書簡中の中心的位置を占める言葉だと思ひます。ヨハネ伝では「独り子」を世に賜つた「神の愛」を示して居り

ますが、ヨハネ書簡では「己が生命」を我等の為に捨て給うた「イエス・キリストの愛」が先曰されてい

ます。パウロが「キリストの愛我等に迫れり」(コリント後書五章)と叫んだその愛を、ヨハネは静かに、しかし力強さをもつて私達の前に示します。神の愛と言ひ、キリストの愛と言ひますが、それは勿論別々のものではありません。唯ヨハネ伝は「神の愛」がキリスト・イエスの事実を通して我らに注がれている事を明かにしているのに対して、ヨハネ書簡はもつと端的にイエス・キリスト御自身の私共に対する比類のない愛について述べます。ヨハネ

書簡も四章に至つて「神は愛である」事について更に明白に致します。

しかし、神の愛は唯イエス・キリストを通してのみ顯れ、そしてその事を通してのみ私共が愛を知つたのである事をヨハネは誰にも劣らず確信させられて居つたのであります。

そして、ヨハネにあつては、「知る」と言う事は単なる認識、或は理性の承認と云ふことではありませぬ。それは彼の衷なる生命の心の底よりの共感であり、むしろ生命の現象としての共鳴であつたと言へます。それはむしろ「神の愛」が一人の人間の存在の最深の部分揺り動かし、変革し、新しい生命に甦らしめる事でありました。その時、古き「我」が死んで、新らしき「永遠なるもの」が彼の中心を占めるに至る事なのであります。そのような「愛」に觸れ、「愛」を知つた時に、彼の

衷なる新しき生命は、「も早や己の為に生きず、己の為に死ぬる事を知らない」(ロマ一四・七)のです。そして進んで兄弟一凡てキリストにあつて私共と生命を共にする者一の為に己の生命をすら捨てる事が可能になるのであります。

信仰とはかくの如き「神の愛」への純粹な信頼、かくの如き「神の愛」に対する謙遜なる応答に外ならないと思ひます。そしてその様な信頼、そのような応答が眞実なものであればある程、私共の信仰的生命的溢流としての「愛」が謙遜なる働きを為し続けうるのであります。

ヨブ記研究 (一)

―私のヨブ記研究―

大森 孝 夫

これからヨブ記の研究を始めたと思います。御承知のようにヨブ記は主人公ヨブの言語に絶する苦悩懊悩の様と、その信仰発展の跡を通じまして私たちに「人は何故艱難に遭うのか」「困苦に在って我ら如何に身を処すべきか」を教えてください。即ちヨブ記は大いなる苦しみにある人の慰めの書、苦しい人生の馳場を経た人の友なる書であります。ヨブ記をみますとヨブの三人の友人が出て参ります。この友人たちはもともとヨブの親友であり彼を慰めんと遠方からやって来たのでありますが悲しいかな、ヨブ記の靈魂の生死に関する苦悩の眞意を

理解できずして慰めるどころか悲しみに呻くヨブの靈魂を力を合わせて鋭くかつ冷酷極りなき氷の刃を以てぶつつりと突き通してしまつたのです。悲しみに打ち伏す人の心を知り本当に慰めることのできる人は悲しみを、身を以て体験した人であります。苦しめる人の慰めの書ヨブ記の精神を知り、ヨブの言語に絶する靈魂の苦闘を本当に述べることのできる人はヨブの如き艱難困苦を体験した人であります。三人の友人の如き安逸な人生体験と形式的信仰の持主ではヨブ記を研究してもわかりません。私はこの夏矢内原忠雄先生のヨブ記講義を承りましたが

最も感銘したことの一つは、先生の「私も苦しみ、泣いた」という低いが力強い御言葉でありました。「キリスト・イエスの僕たるわれ忠雄」と、イエスの名の為に辱めを受け深い御苦難にあつた先生のこの御言葉ほど万巻のヨブ記注解よりも私の魂に肉迫してくるものはありません。信仰を与えられてから早や一年余。黒崎先生、矢内原先生、石原先生と誠に恵れた先生の御教示を受けながら私は依然、薄信の者であります。「形式的信仰の最たるお前がヨブ記研究とはおこがましい」こんな声が何処からか聞えてくるのを否定できません。でも私は祈りながらヨブ記研究を続けます。矢内原先生は、苦しみ抜き涙ながらに感謝の感話をされた人たちに心から慰めら

れた時「本当にキリストを知ることができてよかつたね」としみじみ申されました。神を求めての靈魂の苦闘史、イエス・キリストへの探求史、血と涙の生ける人生の生ける実験録ヨブ記。紙数がありません。単刀直入に云います。私のヨブ記研究はもつともつとイエスを知りたいのです。いや単なる知的理解ではありません。この地上の戦斗、困苦のいついかなる時でも神にしがみつ、感謝をもて仰ぎ、みん為であります。今ヨブ記が分らなければ二十年待ちます。二十年で駄目でしたら三十年待ちます。祈りつゝ学び、いつの日かロマ書八章三十五―三十九節のパウロの凱歌が私の凱歌とさせて頂きたいのです。(未完)

使徒行伝研究 (二)

―生きているキリスト―

半田 梅雄

使徒行伝の真価は、それが人類にとって過去の驚くべき歴史的事実であると共に現在未来をも支配する一貫不動の現実性にあることは既に述べた。これをより具体的に云えば、過去現在未来即ち劫初より永遠に宇宙を支配し給う神が、歴史の中途に於てキリストとして現われ給うた事実により、人類に眞の光明がのぞむ、その生きた証明の書と云うことである。「生きて

いるキリスト」が私を生かす、この驚くべき事実の典型を私たちは行伝に見る。昔ユダヤとその周辺の人々を動かした力が徐々に全世界に浸透し、一九〇〇年後に東洋の小さな島国日本の草深い田舎にも同様にのぞむ。実に不思議なことではないか。「生きているキリスト」「生きている神」それはオーガスチンに於て、ダンテ、ミルトンに於て、バンヤン、パスカルに於て、ヒルテイ、内村鑑三に於て、実に生ける同一の事実として記録されたのである。

絶望、暗黒、虚無、飢餓、恐怖、これらの言葉が代表する現代の苦悶は、人類がまさにひん死の重症にあえいでいる姿のように見える。不安と危機が今日程強く叫ばれた時代はかつてなかったであろう。然し不安と危機は現代人の独占物ではない。猛獣と毒蛇の咆哮(恐威)の中で人類の祖先は成長して来た。ぼう大な殺戮と共に幾世紀にも渡る奴隷生活があつたのである。偏見と我執、嫉妬と貪欲は屢々親子兄弟を敵同士とした。若し神が在し給わないならば、人間が正義と愛を口にするのは最も恥ずべきことなのである。

眼を新聞と雑誌に、耳をラジオ丈に集中してはならない。波の起伏丈に眼を奪われる者は海を知ることが出来ぬ。海は屢々荒れた。然し全魚類の滅亡した例はかつてない。荒れた日もないだ日も魚たちにとつて海はそこが住家であり、食糧の供給所であつた。

ガリラヤ湖畔の漁師の息子たちが、不思議な人物に連れられて、町々や街道や家々を廻り歩いて三年経つた。不思議な人物は、至る所で人々に説いた。説くばかりでなく彼は權威をもつて彼らの中の多くの者に驚くべき回生の処方を与えた。彼が眼をとめたのは書齋にあつて絶望を書いている紳士ではなくて、誰からも忌み嫌われつゝ腐肉をかこつ癩病患者であり、生きる望みのない中風や無惨な精神病者であつた。彼は立派な収容施設の中に彼らを連れて来て、完全看護と完全給食を約束したのではない。盲は見、つんばは聞き、唾はしゃべつた。その不思議な日々の経験が、青年たちにも漸くこれは唯事ではないと予感させた頃、惨憺たる敗北の日は来る。

すべてを棄て、従った頼みの綱の師が、十字架上に奪い去られるのである。彼らの困惑と混乱は想像以上のものがあつたであろう。

使徒行伝はここから始まるのである。

待望の時

第一章一―一四

イエスの十字架の後、四散した弟子たちをエルサレムに集め、待望の時を告げたのは外ならぬイエス御自身であつた。

「エルサレムから離れないで、かねて私から聞いていた父の約束を待っているがよい。すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなた方は間もなく聖霊によつて、バプテスマを授けられるであろう。」

一・五

更に八節にゆくと

「聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地のはてまで、私の証人となるであろう」

聖霊と云い、バプテスマと云い、日本人には甚だなじみ難い言葉であるが、バプテスマは洗礼のことで、キリスト教にのみの儀式ではない。日本の「みそぎはらい」などもバプテスマの一種と云つてよいと思う。「みそぎ」は死の国、死の身に付ける一切の不浄汚穢を洗い去る「身注ぎ」であつて、これにより正しき使命の生涯に入るを意味する（古事記伝第三章）。
こうした罪の浄化が、古代の異民族の間に相互の直接的影響なしに行われて

居つたということは、注目すべきことである。それは人間が本質的に不浄汚穢を持つてゐるか、或は後天的に汚れ易いか、何れにせよ汚いものを持つてゐることを証拠立てゝゐる。

そういう自己の内外の汚れについて、一種の肯定的態度が、現代人の人間主義の中に不遜な形で主張されているのではないか。

とも角イエスの弟子たちは、集まつていてイエスの言葉を素直に従順に聞いた。（一の一四）もしこの時、彼らが四散したまゝか、或はそんなバプテスマがあるものかと、イエスの言葉を否定したなら、使徒行伝は成立しなかつたであろうし、キリスト教が今日このような形で成長して来たかどうか疑問である。

かゝる意味から使徒行伝第一章は聖霊行伝の序章であつて、生前のイエスから直接指導を受けた弟子たちすら未だ使徒即ちイエス・キリストより此の世に遣わされたる大使としての力と使命に充たされない或る特殊の時期のあることを示すものである。このことは私たちが聖書を学んでも、すべての者が直ちに救いにあらずかり、キリスト者として一人立ち出来る力に、満たされるものでないことを教えてゐる。即ち、未信の世界で現実の苦難にあえぐ人々に、こう告げているのだ。

「待望の時」は「忍耐の時」であり、「忍耐の時」は「大いなる力の時」輝やかしき約束成就の前提の時であると。されば御身は待つべきである。

神儒を尊んで神儒を駁す

松本文助

水戸無会グループ主催の西山研修所に於ける夏期聖書講習会は無謀のようであつたが神様の導き給う所により前号A兄の来信の如く「皆んなの喜びにあふれた顔を、感謝に満ちた言葉を、そして希望にあふれた瞳を」以て極めて静肅でなごやかな中に運ばれた。その眞理探求の眞剣さは、三百年前この場所に建立されてあつた久昌寺壇林の学僧達のそれにも劣らなかつたのではないかと想像したのである。当時の壇林には葦酒山門に入るを禁ずとか、

戒律的のようなものも、また注意書きさえもなかつた。且つ集つた者は教会に属していた方が約半数を占め、その教派は三、四派でその所属地を異にしていた。老若男女全く混然としていた。然しその行動においてはキリストを主としたる一大家族のようで、A兄の来信にも「確に教派を超越し、神にあつて一つ心となり、共に靈の交りを持つ事が出来た眞のエクレシアの姿であるという事ができます」とある。

黒崎先生著「一つの教会」もまたブルンナー博士の教会と無教会の「橋かけ」工事もこの講習会に於て如実に現出したのであつた。茲に私は強く感じさせられた。それは「一つの教会」も「橋かけ」工事も其の一大障害となるものは、牧師、宣教師等の職業的宗教家があるからである。研修所長さんが「梅里先生の碑」の印刷物を配付されたが、その中に「神儒を尊んで神儒を駁し、佛老を崇めて佛老を排す」の句があつた。この義公の精神は職業的の神官僧侶を排撃し、眞の神官僧侶に対しては尊崇するとのことである。藩政にも淫祠や小寺を廃して（水戸郷土読本五四頁）之を実行せられたのであつた。

イエスの当時の学者パリサイ人所謂職業的宗教家に対する排撃こそは義公の比ではなく殊に社会的位置を異にしているだけ極めて峻烈で大胆であつた。実に神の子の権威である。（マタイ伝二三章）職業的宗教家こそ「橋かけ」工事の障害にとゞまらずキリスト教を死滅（塚本虎二著宗教と人生）せしめるものである。私共は亦其の旗印を鮮明にし、無牧師主義、皆牧師主義である無教会主義（聖書知識誌三五号）に徹すべきであることを深く反省せしめられたのである。

日曜集会

毎日曜十一時から集会をします。自由に参加して下さい。

ガラテヤ書研究 半田ヨブ記研究 大森

水戸市東原町水戸幼稚園内

来 信

土 浦 K 兄

家造りらの捨てた石は隅のかしら石となつた。これは主のなされたことで、われらの目には驚くべきことである。

詩篇一一八篇二一―二三
多忙と筆不精にかこつ私の怠惰をお叱り下さいます様に。西山の聖き集いは谷川の流れにあえぐ鹿の様に喝き切つた私の心にいやしを与え、しおれ切つた草花に水を注ぎ、しかも聖靈の水を注ぎ給いました。早天祈禱会の始まります前、朝まだき野に出でて一人祈つておりました折、この様に考えました。この世の家造りらの捨てた石が、しかも

キリスト・イエスの十字架の贖いにより、その生命を失ひし儀式の律法の僕たる教会にある家造らにも捨てられた石が、茨城の一隅に落ちて、今や隅の首石となり、その上に築かれつゝある水戸無教会の姿、これこそエホバの成し給える事にして我らの目にあやしとするところであると。

西山に呼び集められた一人一人が、各々その境遇のあるところ、その靈の歩み来つた道についてお語り下さいました。崑びにみちて語られたそれぞれの苦難の道が、神の御名のあがめられん為にあることを一

層感じます故に、己れの歩んできた平易な道が、信仰の故に与えられた平安と考へることの傲慢さ、誠に風のふきさる糝糠の如き身を悟らぬ愚かしさを今更身にしみて、云い遁れる術なき罪の数々を一つ一つ指して数えらるゝ如くでございました。

罪の意識とは同時に神を知ることであり、人間の絶望であり、この三者は同時におこることである。

これは黒崎先生のガラテヤ書の御講義の一節であります。西山の集りに、私が黒崎先生の御講義を通じて信仰の糧をいただきましたとともに、皆様の信仰と祈りを通して、罪の意識を新たにし、人間的な絶望を感ずると同時に、神を知ること、即ちこの目を以て神を見、この耳を以て神を聞

き、この手を以て神に触れんばかりの恩恵に浴したことは、云い表わし得ない感謝で御座いました。

御一緒に信仰の道を闘いつつて行きたいと存じますが、とかく恩恵にあまえずぎ、ともするとつぶやきがちな私をよろしく御教導下さいます様御願ひ申し上げます。

御平安と御健康、主の御恵のうちに豊かならんことを御祈り申し上げます。

昭和三十年八月二十六日

汝ら相愛すべし。わが汝らを愛せし如く、汝らも相愛すべし。互に相愛する事をせば、これによりて人みな汝らの我が弟子たるを知らん。

(ヨハネ一三・三四―三五)

後記

九月九日福島より御帰京の塚本先生を、松本兄が水戸駅にお送りした。晴無の根本兄たちも一緒に、暫し歓談の花が咲いた由。

九月十三日九時四十五分晴無の川崎嘉七兄昇天。二日前の十一日急を聞いて駆けつけ、数時間共に過して来た後なので、兄の苦斗を思つて胸がつまつた。最後まで意識が明瞭で、もう行きますから讚美歌をと友人達に求め、その終るのを待つて急激な苦斗と共に兄の霊は神のみもとに召されたという。

みに七年過した兄の「生き地獄」の真中に天国が建てられるという信仰。三月号「福音書を通読して」には神の子イエスに敵が絶え間なく、常につけ狙われて遂にその手に落ちて十字架につけられた大きな矛盾を洞察して、イエスを殺したものは自分だと叫び、四月号「告白」には一療友との關係に於て、自分が如何に非情な人間であつたかを激しく責め、「罪と罪に対する恐れが私の魂から消えない、消えないばかりが増々強くなる。なんたる矛盾、だがこの矛盾こそ基督者をして日々新に主の十字架に追いやり且つその恩恵に慣れる事なく信仰の生涯を完うするに役立つのではないかと思う。さらば日々恩恵による矛盾を起し給え」と結んでいる。

五月号「盲人の目を開く」に「イエスに手を引かれてイエスに全身全霊を委ねて従がう盲人、繋がる手から手を経て、新しく完成した水路に水がとうとうと流れ込む様に、イエスの生命が盲人に注がれてゆく。」こゝに兄のひたむきなイエスへの信頼が溢れている。

八月号「富士山」では、その雄大な美しい容姿に感嘆する前に爆発、噴火、地震、地鳴りが激しく繰返えされるうちに誕生した富士山の生成に注目し、「私は人に褒められるようなものでなく、脆くて弱いものなのです。唯この弱さを神が怒りの爆発の場所として用いられて外の場所を救うと共に自分もこんなに高くしてくれました」と富士山の嘆きを述べている。

「私の日曜学校」は、ラザロに対するイエスの愛、マリヤ達と共に泣くイエスの人間は、ラザロの復活を知り盡すイエスと矛盾しないことを心をこめて語っている。

こう書いてきて、兄が如何にイエスを慕い、イエスを愛し、信じていたか、胸をしめつけられる思いがする。そして神の恩恵に激しくうたれる。感謝だ。

兄よ！天国にて安かれ。

(半田)

昭和三十年九月 発行

水戸無教会第七号

実費十円下共

編集兼印刷人 半田梅雄

発行人 松本文助

発行所 水戸市東原町四六四二

水戸幼稚園内

水戸無教会